

保育所の保育者と保護者の保育観に関する 意識の比較

— 保育所と保護者に対する意識調査の結果から —

田中 浩二・大塚 良一・福山多江子・
田中 利則^{*1}・中川 浩一^{*2}・肥塚 新一^{*3}

I はじめに

児童福祉法第24条において、「市町村は、保護者の労働又は疾病その他政令で定める基準に従い条例で定める事由により、その監護すべき乳児、幼児又は児童の保育に欠けるところがある場合において、保護者からの申し込みがあったときは、それらの児童を保育所において保育しなければならない」とされており、1947年の児童福祉法制定以来、保育の目的の本質は変わっていない。しかし、「保育」の概念や幅については時代背景や社会的状況に応じて刻々と変化している。例えば、2001年の児童福祉法改正により保育士が国家資格となり、2004年には保育士の業務として児童の保育に加えて保護者に対する保育に関する指導が規定された。保育所保育指針についても2008年3月に3回目の改定がなされ、子どもの保護者に対する子育ての支援、地域社会における保育所の社会的責任などが明示された。¹⁾つまり、保育所によって提供される保育は子どもだけを対象に提供されるのではなく、子どもを取り巻く保護者や社会をも包含した対象として提供されなければならない。

さらに、保育士は子どもに対する保育者であると同時に、保護者に対する指導者としての役割を担うことになった。一方、介護保険の導入などによる社会福祉サービスの利用者主義の流れは保育所においても例外ではなく、2000年の社会福祉法の改正により保育所でも苦情処理機能や福祉サービス第三者評価事業が導入された。その結果、サービス提供者としての保育所（保育者）と、サービス利用者としての保護者という関係が位置づけられた。サービス提供者とサービス利用者という関係においてはサービス利用者のニーズへの充足が重要視される傾向にあり、位置関係においても同等もしくは利用者が上位に位置する。保育者に課せられた指導者とサービス提供者という2つ役割は、サービス利用者である保護者との位置関係において矛盾する関係にあり、それは時として、子どものためにと提供される保育者による保護者への指導が苦情を引き出してしまうかねないという現実を生み出し、保護者と保育者との間での軋轢を生じさせる。今後、指導者とサービス提供者という、相反する立場に位置する保育所あるいは保育者が、積極的に自らの役割を果たしていくためには、保護者の子育てや保育に関する意識を理解した上で、保護者とどのような関係を作らなければならないのか、どのような保育を提供すべきなのかを改めて検討する必要がある。

本研究では、保護者と保育者が子育てや保育に対して共通の認識を持っているのか、また相違があるとすればどのような点にあるのかを検討し、今度、協働して子育てや保育に関わるにはどのようにすべきかを検討することを目的とした。

*1 翔北短期大学

*2 勝山保育園

*3 聖母園

Ⅱ 方法

i 調査対象

中核市である下関市内の保育所60ヶ所（公立保育所27ヶ所、私立保育所33ヶ所）のうち、58ヶ所（公立保育所27ヶ所、私立保育所31ヶ所）に在園する子どもの保護者全員および所属する保育士全員を対象とした。

ii 調査方法

保護者については、保護者用調査票（資料1）を直接配布し、回収箱および手渡しによる回収を行なった。保育士については、各保育所の調査担当の保育士が保育士用調査票（資料2）を所属する保育士に配布し、回収した。

保護者用調査票（資料1）の調査項目は、A：「回答者の基本情報（年齢、性別、子どもとの続柄、家族構成など）」、B：「子どもについて（年齢、性別、兄弟姉妹の有無、起床・就寝時間など）」、C：「家庭での子育てに関して（14項目）」、D：「保育所との関わりについて（15項目）」、E：「保育所での保育について（10項目）」、F：「家庭と保育所の子育ての役割について（20項目）」の6つの項目群で構成した。

保護者用調査票の評価尺度については、C：「家庭での子育てについて」とD：「保育所との関わり」、E：「保育所での保育について（質問項目10を除く）」は、「思う（している）」から「思わない（いない）」までの4段階による評価を行なった。一部、子どもの年齢によって適切な回答が得られないと予測される項目については「非該当（まだしていない）」を加えた。E：「保育所での保育について」の質問項目10については、15の選択肢から3つまでを選択する形式とした。F：「家庭と保育所の子育ての役割」は、子どもの成長発達に関する20項目について、主として担われるべき役割の主体として、「家庭」、「保育所」、「共同で行なう」、の3つから選択する形式とした。なお、保育所に在園する子どもが複数いる場合は、年齢が上の子どもについて記入することとした。

保育士用調査票（資料2）の調査項目は、A：「回答者の基本情報（年齢、経験年数、勤務形態など）」、B：「保護者との関わりについて（15項目）」、C：「保育所の保育について（10項目）」、D：「家庭と保育所の子育ての役割について（20項目）」、の項目群で構成した。回答者の基本情報以外は、保護者用調査票と同様あるいは対応できる形式とし、分析において比較できるようにした。保育士用調査票の評価尺度については、保護者用調査票と同様とした。

調査票は保護者用調査票、保育士用調査票ともに自記式調査票であり、回答者が特定されないよういずれも無記名とした。

調査期間は2007年10月1日から10月31日であった。

iii 分析方法

分析については、第1に、保護者および保育士の回答それぞれの記述統計を行なった。記述統計量を算出する際、項目間の相対的な位置関係を示すために、保護者については「家庭での子育てに関して（14項目）」と「保育所との関わりについて（15項目）」および「保育所での保育について（10項目中の質問10を除く9項目）」で、保育士については「保護者との関わりについて（15項目）」と「保育所での保育について（10項目中の質問項目10を除く9

項目)」で、各項目の測定結果を Item index として示した。Item index は以下の数式で求めた。

$$\text{Item Index} = \frac{N(a1) \times N(a2) \times 33.33 + N(a3) \times 66.66 + N(a4) \times 100}{N(a1) + N(a2) + N(a3) + N(a4)}$$

a は質問項目の回答を表し、 $a1$ は「思わない (いない)」、 $a2$ は「あまり思わない (あまりいない)」、 $a3$ は「まあまあ思う (まあまあいる)」、 $a4$ は「思う (している)」を意味する。回答者の全ての回答が「思う (している)」であった場合、Item index の値は100になり、全ての回答が「思わない(いない)」であった場合、Item index の値は0になる。つまり、Item index は各項目の「思う (している)」の発現を0から100の間で示す目安として用いることができ、各項目間の比較を行なうことが可能になる。Item index の計算にあたっては、「不明 (無回答)」および「非該当」は除外した。

保護者および保育士の「保育士 (保護者) との関わりについて」と「保育所の保育について」、さらに「家庭と保育所の子育ての役割について」の3つの質問項目群で保護者の結果と保育士の結果を比較した。「保育士 (保護者) との関わりについて」および「保育所の保育について (質問項目10を除く)」では、保護者と保育士との回答の違いを確認するために Mann-Whitney 検定を行った。同様に、「保育所の保育について」の質問項目10については、Fisher の直接法による検定を行なった。さらに、「家庭と保育所の子育ての役割について」の保護者と保育士による回答の違いの分析については χ^2 検定を行なった。

なお、本調査結果における内的信頼性を確認するために、項目群での Cronbach α 係数を求めた。

統計解析においては SPSS12.0J を使用した。

Ⅲ 結 果

i 対 象

山口県下関市の公立及び私立保育所58ヶ所に対し、保護者については4099件、保育士については663件の調査票を配布し、同意が得られた保護者3245件 (回収率79.2%)、保育士648件 (回収率97.7%) を回収した。

回答を得た保護者3245件の特性は次に述べるとおりであった。回答者は母3032名 (平均年齢33.1歳、標準偏差 ± 5.0)、父129名 (平均年齢33.9歳、標準偏差 ± 6.9)、祖母24名 (平均年齢56.8歳、標準偏差 ± 8.9)、その他4名 (平均年齢52.5歳、標準偏差 ± 18.2)、不明56名であった (表1)。

回答を得た保育士648件の特性は次に述べるとおりであった。回答者の平均年齢は34.7歳 (標準偏差 ± 11.0)、平均経験年数は10.7年 (標準偏差 ± 9.2) であった。勤務形態については、常勤が466名 (71.9%)、非常勤が181名 (27.9%)、不明が1名 (0.2%) であった。担当児童については年長担当が77名 (11.9%)、年中担当が63名 (9.7%)、年少担当が92名 (14.2%)、3歳未満児担当が227名 (35.0%)、乳児担当が142名 (21.9%)、その他45名 (6.9%)、不明2名 (0.3%) となった (表2)。

表1 回答者(保護者)の属性と平均年齢 (n=3245)

回答者	度数 (%)	平均年齢 (標準偏差)
母	3032 (93.4)	33.1 (± 5.0)
父	129 (4.0)	33.9 (± 6.9)
祖母	24 (0.7)	56.8 (± 8.9)
その他	4 (0.1)	52.5 (± 18.2)
不明	56 (1.7)	—
計	3245	33.3 (± 5.6)

表2 担当児童 (n=648)

項目	度数
年 長	77
年 中	63
年 少	92
3歳未満	227
乳 児	142
その他	45
不 明	2
計	648

ii 保護者と保育士の結果の比較

保護者と保育士による、保育士(保護者)との関わりについての比較の結果は表3に示した。保護者と保育士との間の回答に差があるか否かを分析するため、Mann-Whitney 検定を行なった結果、質問項目2「食事の様子について把握して(伝えて)いるか」や質問3「排泄の様子について把握して(伝えて)いるか」など11項目に差が見られた。差が見られた11の質問項目における保護者と保育士の回答の傾向については、質問11「保育士(保護者)と気軽に個別相談ができるか」から質問15「保育所(保護者)との子育ての共通理解が得られていると思うか」の5項目で保育士よりも保護者の Item index が高かった。一方、質問4「着脱の様子について把握して(伝えて)いるか」を除く、質問1「保育目標・内容について把握して(伝えて)いるか」から質問8「ケガの状況・様子について把握して(伝えて)いるか」の7項目で保護者より保育士の方が高い Item index を示した。

表3 「保育士（保護者）との関わりについて」の比較

(n=3893)

項 目	対象者	選択肢				Item Index	P 値
		思う	まあまあ 思う	あまり 思わない	思わない		
1. 保育目標・内容の把握	保護者 保育士	1030(32.2) 244(38.1)	1847(57.8) 319(49.8)	299(9.3) 70(61.5)	22(0.7) 7(4.8)	73.8 75.0	0.08
2. 食事の様子の把握	保護者 保育士	980(30.8) 330(51.4)	1605(50.1) 270(42.1)	554(17.3) 36(5.6)	67(2.1) 6(0.9)	69.7 81.3	0.00*
3. 排泄の様子の把握	保護者 保育士	1136(35.5) 339(52.7)	1472(46.0) 240(37.3)	504(15.8) 55(8.6)	88(2.8) 9(1.4)	71.4 80.5	0.00*
4. 着脱の様子の把握	保護者 保育士	972(30.4) 208(32.6)	1462(45.7) 296(46.3)	660(20.6) 118(18.5)	106(3.3) 17(2.7)	67.7 69.6	0.12
5. 遊びの様子の把握	保護者 保育士	747(23.3) 325(50.5)	1757(54.9) 289(44.9)	618(19.3) 24(3.7)	81(2.5) 5(0.8)	66.3 81.7	0.00*
6. 人間関係の様子の把握	保護者 保育士	548(17.1) 215(33.7)	1682(52.5) 322(50.5)	834(26.1) 92(14.4)	137(4.3) 9(1.4)	60.8 72.1	0.00*
7. 体調の様子の把握	保護者 保育士	1220(38.1) 549(85.1)	1644(51.4) 85(11.2)	290(9.1) 7(1.1)	45(1.4) 4(0.6)	75.4 94.3	0.00*
8. ケガの状況・様子の把握	保護者 保育士	1546(48.4) 584(90.4)	1350(42.3) 54(8.4)	243(7.6) 4(0.6)	56(1.8) 4(0.6)	79.1 96.2	0.00*
9. 保育についての情報交換	保護者 保育士	982(30.7) 160(25.0)	1525(47.7) 382(59.7)	570(17.8) 90(14.1)	121(3.8) 8(1.3)	68.4 69.5	0.93
10. 保育士(保護者)とのコミュニケーション	保護者 保育士	1110(34.7) 191(29.7)	1539(48.1) 376(58.5)	468(14.6) 68(10.6)	83(2.6) 8(1.2)	71.6 72.2	0.83
11. 保育士(保護者)との個別相談	保護者 保育士	1447(45.2) 176(27.5)	1208(37.8) 323(50.4)	432(13.5) 127(19.8)	113(3.5) 15(2.3)	74.9 67.7	0.00*
12. 配布物の理解	保護者 保育士	2335(72.9) 156(24.3)	810(25.3) 373(58.2)	52(1.6) 106(16.5)	6(0.2) 6(0.9)	90.3 68.6	0.00*
13. 行事・活動の伝達	保護者 保育士	2114(66.0) 281(43.6)	929(29.0) 318(49.4)	124(3.9) 39(6.1)	36(1.1) 6(0.9)	86.6 78.6	0.00*
14. 保育園(保護者)との子育ての協力	保護者 保育士	1705(53.5) 109(17.0)	1284(40.1) 424(65.9)	190(5.9) 104(16.2)	22(0.7) 6(0.9)	82.0 66.3	0.00*
15. 保育園(保護者)との子育ての共通理解	保護者 保育士	1264(39.5) 57(8.9)	1547(48.4) 426(66.6)	336(10.5) 151(23.6)	51(1.6) 6(0.9)	75.3 61.1	0.00*

注1：カッコ内はパーセンテージ

注2：無回答があるため、各項目の合計は必ずしも一致しない

注3：Mann-Whitney 検定、*P<0.05

「保育所の保育について」の保護者と保育士の比較については、表4に示した。Mann-Whitney 検定により、保護者と保育士の回答に差が見られた質問項目は、質問1「成長にあった保育の提供」や質問2「子どもが楽しく過ごせる環境だと思うか」など7項目であっ

表4 保護者と保育士Jの「保育園の保育について」の比較

(n=3893)

項目	対象者	選択肢				Item Index	P 値
		思う	まあまあ思う	あまり思わない	思わない		
1. 成長にあった保育の提供	保護者 保育士	1999(63.6) 234(36.4)	1059(33.7) 377(58.7)	71(2.3) 29(4.5)	13(0.4) 2(0.3)	86.8 77.1	0.00*
2. 子どもが楽しく過ごせる環境	保護者 保育士	2164(68.0) 331(51.6)	949(29.8) 277(43.1)	61(1.9) 34(5.3)	10(0.3) 0(0.0)	88.5 82.1	0.00*
3. 成長に適切な給食の提供	保護者 保育士	2449(77.3) 437(68.1)	646(20.4) 178(27.7)	64(2.0) 26(4.0)	8(0.3) 1(0.2)	91.6 87.9	0.00*
4. 保育園内の清潔	保護者 保育士	2060(65.3) 387(60.0)	979(31.0) 233(36.1)	99(3.1) 22(3.4)	15(0.5) 3(0.5)	87.1 85.2	0.01*
5. 保育室の整理・整頓	保護者 保育士	2316(73.7) 298(46.3)	786(25.0) 304(47.2)	35(1.1) 40(6.2)	4(0.1) 2(0.3)	90.8 79.8	0.00*
6. 安全が保たれた環境	保護者 保育士	1750(55.9) 373(57.9)	1214(38.8) 251(39.0)	134(4.3) 19(3.0)	32(1.0) 1(0.2)	83.2 84.9	0.19
7. 健康に配慮した保育の提供	保護者 保育士	1984(63.5) 394(61.3)	1041(33.3) 231(35.9)	83(2.7) 18(2.8)	17(0.5) 0(0.0)	86.6 86.2	0.35
8. 保育についての情報提供	保護者 保育士	1455(45.9) 195(30.6)	1274(40.2) 370(58.0)	344(10.8) 70(11.0)	99(3.1) 3(0.5)	76.3 72.9	0.00*
9. 保育についての満足	保護者 保育士	1825(56.8) 114(18.0)	1179(36.7) 471(74.3)	161(5.0) 48(7.6)	50(1.6) 1(0.2)	82.9 70.0	0.00*

注1：カッコ内はパーセンテージ

注2：無回答があるため、各項目の合計は必ずしも一致しない

注3：Mann-Whitney 検定、*P<0.05

た。保護者と保育士の回答と特性として、Mann-Whitney 検定において差が見られた項目の全てで保育士よりも保護者の方が高い Item index を示した。さらに、質問10「今後、新たに保育サービスが追加される（あるいは強化・充実される）としたら、どのような保育サービスを望むか」について、保護者と保育士の回答の比較を表5に示した。保護者と保育士の回答の差を確認するために Fisher の直接法による検定を行った結果、「運動能力の育成」や「生活習慣の育成」、「文字・数字の学習」など全15項目中11項目で差が見られた。差が確認された11項目における保護者と保育士の回答の傾向としては、「運動能力の育成」や「文字・数字の学習」、「保育の情報提供」、「朝食（夕食）の提供」、「保育時間の延長」、「休日・祝日の保育」の6項目で保護者の方が高い割合を示した。一方、保育士の割合が高かった項目は「生活習慣の育成」や「食育の推進」、「育児相談」、「親子の交流」、「地域との交流」の5項目となった。

「家庭と保育所の子育ての役割について」の保護者と保育士の比較の結果を表6に示した。保護者と保育士の回答の差を確認するために項目毎で χ^2 検定を行なった。検定の結果、「生活習慣の獲得」や「食事のしつけ・マナー」、「偏食（好き嫌い）の矯正」など20項目中17項目で保護者と保育士との間の回答で差が確認された。差が見られた項目の主な回答特性とし

表5 保育園の保育について：質問10（望む保育サービス）の比較

(n=3893)

項 目	保護者 (%)	保育士 (%)	P 値
1. 今のままでよい	22.0	20.4	0.46
2. 情緒・感性の育成	18.3	21.6	0.35
3. 運動能力の育成	16.2	8.5	0.00*
4. 生活習慣の育成	10.0	23.5	0.00*
5. 文字・数字の学習	31.7	1.2	0.00*
6. 食育の推進	9.0	27.2	0.00*
7. しつけ	8.6	9.6	0.40
8. 育児相談	7.1	21.9	0.00*
9. 保育の情報提供	16.0	8.5	0.00*
10. 朝食（夕食）の提供	4.7	1.4	0.00*
11. 保育時間の延長	12.9	0.9	0.00*
12. 休日・祝日の保育	17.8	0.5	0.00*
13. 親子の交流	7.7	20.4	0.00*
14. 地域との交流	7.1	10.0	0.01*
15. 世代間交流	12.1	9.7	0.12

注1：保護者と保育士の値は、各項目と各対象の「望む」と答えた割合

注2：Fisher の直接法（両側）、*P<0.05

て、「生活習慣の獲得」や「食事のしつけ・マナー」、「偏食（好き嫌い）の矯正」、「言葉遣い」、「排泄トレーニング」、「衣服の着脱トレーニング」、「身体の清潔」、「適切な睡眠」、「健康管理」、「衣服の清潔」、「衣服の修繕」、「情緒・感性の育成」の12項目で、保護者は主な役割の主体を家庭としているのに対し、保育士は共同で行なうべきとした。また、「遊び（方）の習得」や「友だちとの人間関係」、「社会性の発達育成」、「好奇心・関心の育成」については、保育士が保育所の役割と有意に回答した。さらに、「言葉・文字・数字の学習」については、保護者が共同の役割としているのに対し、保育士は家庭の役割とする傾向が強かった。

表6 保護者と保育士の「家庭と保育園の子育ての役割について」の比較

(n=3893)

項目	対象者	選択肢			P 値
		家庭	保育園	共同で行う	
1. 生活習慣の獲得	保護者 保育士	1174(37.7) 131(20.6)	22(0.7) 2(0.3)	1914(61.5) 504(79.1)	0.00*
2. 朝食の摂取	保護者 保育士	3031(96.5) 629(97.7)	13(0.4) 1(0.2)	98(3.1) 14(2.2)	0.27
3. 食事のしつけ・マナー	保護者 保育士	1027(32.7) 98(15.2)	13(0.4) 0(0.0)	2098(66.9) 546(84.8)	0.00*
4. 偏食（好き嫌い）の矯正	保護者 保育士	1315(42.0) 81(21.6)	21(0.7) 5(0.8)	1795(57.3) 558(86.6)	0.00*
5. 言葉使い	保護者 保育士	869(27.7) 79(21.3)	20(0.6) 8(0.5)	2250(71.7) 559(87.2)	0.00*
6. 排泄のトレーニング	保護者 保育士	695(22.1) 31(4.8)	32(1.0) 6(0.9)	2411(76.8) 607(94.3)	0.00*
7. 衣服着脱のトレーニング	保護者 保育士	873(27.8) 48(7.5)	28(0.9) 7(1.1)	2237(71.5) 589(91.5)	0.00*
8. 遊び（方）の習得	保護者 保育士	69(2.2) 7(1.1)	465(14.8) 159(24.7)	2606(83.0) 478(74.2)	0.00*
9. 身体を清潔に保つこと	保護者 保育士	1547(49.3) 180(28.0)	11(0.4) 1(0.2)	1580(50.4) 463(71.9)	0.00*
10. 適切な睡眠の習慣	保護者 保育士	2535(80.7) 355(55.1)	14(0.4) 2(0.3)	592(18.8) 287(44.6)	0.00*
11. 健康の管理	保護者 保育士	1840(58.6) 142(22.2)	7(0.2) 2(0.3)	1293(41.2) 496(77.5)	0.00*
12. 友だちとの人間関係	保護者 保育士	68(2.2) 8(1.3)	551(17.6) 210(32.8)	2518(80.3) 422(65.9)	0.00*
13. 衣服の清潔	保護者 保育士	2145(68.2) 288(44.7)	10(0.3) 4(0.6)	988(31.4) 352(54.7)	0.00*
14. 簡単な衣服の修繕（ボタン付け等）	保護者 保育士	2623(83.7) 507(78.8)	27(0.9) 3(0.5)	485(15.5) 133(20.7)	0.00*
15. 安全の確保	保護者 保育士	128(4.1) 14(2.2)	155(4.9) 55(8.6)	2856(91.0) 573(89.3)	0.00*
16. 言葉・文字・数字などの学習	保護者 保育士	299(9.5) 134(20.8)	134(4.3) 26(4.0)	2707(86.2) 485(75.2)	0.00*
17. 好奇心・関心の育成	保護者 保育士	91(2.9) 10(1.6)	130(4.1) 44(6.8)	2921(93.0) 591(91.6)	0.00*
18. 運動能力の育成	保護者 保育士	54(1.7) 9(1.4)	341(10.9) 91(14.1)	2746(87.4) 544(84.5)	0.05
19. 情緒・感性の育成	保護者 保育士	182(5.8) 23(3.6)	93(3.0) 23(3.6)	2866(91.2) 598(92.9)	0.06
20. 社会性の発達育成	保護者 保育士	100(3.2) 9(1.4)	215(6.9) 83(12.9)	2823(90.0) 553(85.7)	0.00*

注1：数字は度数、カッコ内は各項目における各対象内の割合

注2：無回答があるため、各項目の合計は必ずしも一致しない

注3： χ^2 検定、 $P^* < 0.05$

なお、本調査結果の内的信頼性を確認するための Cronbach α は表7に示すとおりである。最も高い Cronbach α を示した項目群は保護者の「保育所との関わり」の0.92であった。最も低い保護者の「家庭での子育てについて」でも Cronbach α =0.70であり、本調査における内的信頼性は十分に高かった。

表7 保護者および保育士の各項目群毎の信頼性係数

項 目 群	Cronbach α	
	保護者	保育士
家庭での子育てについて（14項目）	0.70	—
保育園（保護者）との関わり（15項目）	0.92	0.90
保育園の保育について（9項目）	0.89	0.84
家庭と保育園の子育ての役割について（20項目）	0.77	0.78

注1：保護者の n=3245、保育士の n=648

Ⅳ 考 察

i 保護者と保育士の意識

今回の研究は、保護者と保育者が子育てを展開していくために何が必要であるかを検討するための基礎的資料として、保護者と保育士による子育てや保育または保育所に関する意識を調査し、比較・分析を行った。

その結果、子育てや保育園での保育について保護者および保育者ともに全体的に肯定的かつ高い意識を持っていることが伺えた。一方、高くかつ肯定的な意識を持っている中で、多くの側面において意識の乖離が生じていることも明らかになった。保護者と保育者の意識の乖離は大きく以下のような特徴に分けることができる。

第1に、保育者の活動が保護者の意識や活動に結びついていない場合である。例えば、表3の「保育士（保護者）との関わりについて」の比較で示した結果の質問2「食事の様子の把握」や質問5「遊びの様子の把握」、質問7「体調の様子の把握」のように、保護者よりも保育士のほうが高い Item index を示している項目である。つまり、保育士は様々なことを伝えていると思っているが、保育者が思っているほど保護者には伝わっていないことを意味する。

第2に、保育者の活動の意識に対して保護者の反応が上回っている場合である。例えば、表3の「保育士（保護者）との関わりについて」の比較での質問12「配布物の理解」や質問13「行事・活動の伝達」、質問14「保育士（保護者）との子育ての協力」などや、表4の保護者と保育士の「保育所の保育について」の比較で有意差が認められた項目などである。

第3に、保護者と保育者間での保育所における保育観の相違である。表5の保育所の保育についての質問10（望む保育サービス）や表「家庭と保育所の子育ての役割の比較」の結果に見られるように、保護者と保育者との間で望む保育サービスや役割の認識が複数の項目で異なっている。つまり、保育者が保育所で提供すべきあるいは提供したいと考えるサービスと、保護者のニーズとの間に乖離が生じていることが伺える。

第1の乖離については、保護者と保育者間のコミュニケーションの密度や伝達方法などの工夫や改善で対処することが可能であると考えられる。第2の乖離については、保育者が考

えている以上に保護者が良好な反応を示している結果であり、保育者としてはむしろ良い結果であるともいえる。また「保育所の保育について」は、保育者は自らの保育の自己評価になっているため、調査対象である保育者が低く自己評価した可能性も考慮される。

今回の結果で最も注目すべきは第3の乖離である。保育所における保育者の提供するサービスと保護者のニーズの相違は、保護者の保育サービスに対する満足度を阻害するだけでなく、保護者と保育者あるいは保護者と保育所の信頼関係の形成にも重要であると推測される。このことに保育者が対応するとして、第1には、保護者のニーズに保育所や保育者が応えるということである。第2に、保護者のニーズが保育者や保育所のサービスに寄るように働きかける、言い換えれば、保育所で提供すべきサービス内容やその必要性・重要性を保護者に積極的に伝達し、保育サービスの目的や意図の理解を促すことが考えられる。いずれにしても、保護者の意識、保育者の意識を双方が理解したうえで、意識の共有を図ることが必要であるといえる。

本調査研究における結果では、保護者と保育者の意識に多くの項目で統計学上の相違が見られたのは事実であるが、多数の保護者と保育者では共通の意識が持たれている。保育や幼児教育にかかる新しい制度に移行しようとしている昨今、保育や子育て意識の相違のもとになっている保護者あるいは保育者の特性を分析することで、子どもや保育者の利益に即した保育を提供できると考えられた。

ii 本調査研究の特徴

本調査研究の特徴的な点として、1つは、保育所や子どもに関わる保護者と保育者の両方の意識調査を行なった点である。本研究の趣旨である保護者と保育者のより良い関係を構築していくためには、保護者あるいは保育者の一方だけの意識の把握では不十分であり、双方の把握と、それに基づいた共通部分と相違部分の確認が必要である。本調査の分析結果においても、保護者と保育者の意識の違いが明らかになり、今後、保護者と保育者がより良い関係を目指していくための着目点が明らかになった。

2つ目として、本調査の調査項目の設定に際し、保育士が関わっていると同時に、保育所保育指針の内容も考慮して設定した点である。保育所での保育を行なう主体である保育士が調査票の作成に関わることで、共有すべきであると推測される子育てや保育に関わる意識を調査項目に反映することができる。また、保育所保育指針は保育所で保育を展開する上での基本的事項であり、保育所においてはこの保育所保育指針に基づいて保育サービスの目標が設定され、計画・実践されている。現状における課題を明らかにするためにも、現在の保育所の状況を考慮した調査項目の設定が必要であると考えられた。

3つ目としては、ほぼ全数に近い保育所で調査を行なったという点である。下関市は中核市であるとともに、山口県で最大の都市である。調査を実施した2007年10月時点において下関市内の保育所は公立保育所27ヶ所、私立保育所33ヶ所の計60ヶ所であった。そのうちの約97%にあたる58ヶ所で調査を行なった。本調査の結果を基に、下関市内の各保育所で、保護者と保育者が良好な関係を構築してくための実践を計画・展開していくにあたっては十分な結果が得られた。

iii 本研究の限界

本調査研究における限界としては、第1に、本調査で明らかになった保護者のニーズが全てのニーズではないという点である。本研究の趣旨から調査票の設定においては、現在保育所で提供しているもしくは提供が可能であろうと考えられるサービスやサービス提供に関わる意識などを中心に調査項目を設定したため、設定項目以外のニーズや意識については把握できない。したがって、子育てや保育サービス全体を包括した保護者ニーズを把握するには更に詳細な調査が必要である。ただし、今回の分析には含めていないが、本調査の一部に、保育ニーズに対する自由記述項目を設定しており、今後整理することである程度は把握することが可能であると考えられる。

2点目として、現在、保育サービスや保育ニーズにおける意識を定量的に評価・把握するための統一した方法は確立されておらず、調査項目を設定する場合、先行研究から得られる知見や研究の趣旨などから構成される。本調査で用いた調査票も本研究のために設定したものであるため、調査票自体の信頼性および妥当性が十分に確保されていない可能性があるため、今後、保育サービスやニーズに対する意識の評価方法の検討も必要である。ただし、本調査における結果の内的信頼性はCronbach α によって確認されている。

3点目として、本調査結果は下関市という一地域を対象にしているため、他地域への本結果の活用には注意を要する。加えて、本分析の結果は対象者全体の結果であり、対象者の属性や特性による分析は行っていない。本調査結果を規定する様々な要因に関しては、更なる詳細な分析を要するところであり、今後の課題とする。

V 結 論

保護者と保育者の子育てや保育に関する意識の実態を明らかにする調査を行なった。

その結果、第一に、保護者の子育てにおける意識は高く、また保育に対しても肯定的な意識が多いことが明らかになった。また、保育士の保育に対する意識も高いことが明らかになった。さらに、多数の保護者と保育者が高い意識を持っている一方、多くの側面で意識の相違が生じていることが確認された。その相違には、保育サービスを提供する上で好意的に捉えられることが可能なものと、相違を改善する必要があると考えられるものがあつた。

謝 辞

調査にご協力いただいた下関市保育連盟の保育者と保護者の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本稿は、下関市保育連盟が実施した「保護者の保育者のより良い関係を目指して—保護者と保育者の意識調査を通して—」の内容の一部を加筆修正したものである。

参考文献

- 1) 厚生労働省、保育所保育指針、2008.